



「植調」誌とブラジルの思い出

公益財団法人日本植物調節剤研究協会理事
 農薬工業会副会長
 溝口 正士

40年近く前、社会人になって最初の職務が農薬開発、委託試験担当でした。そのときすでに「植調」誌は発刊16年の歴史があり、新入社員にとってのたいへん勉強になる月刊誌でした。ただ入社して約20年間は殺虫剤の担当だったので、正直なところ「植調」誌はいつも近くにありながらばらばらと流し読みする程度でした。

40歳を過ぎて海外営業担当になり、2005年にブラジルに赴任しました。その頃、コンさんという方がときどきサンパウロの事務所に来られて、いつも「植調」誌を置いていてくれました。コン(近)さんは日本から移民された一世で、アグロコスモス社という農薬の圃場試験を行うラボの責任者でした。このアグロコスモスの前身がブラジル植調試験場です。コンさんは、ルイス・ホンマさんという方と二人でアグロコスモスを運営し、除草剤だけでなく殺虫剤や殺菌剤の試験もされていて、その受託のための営業活動を兼ねて農業各社を訪問し、日本の会社には「植調」誌を配布されていたのです。当時私は事務所では日本人一人だけで、日本語の本に飢えていたこともあって「植調」誌は愛読誌になり、コンさんの来社を楽しみにしていたのです。

アグロコスモスはサンパウロ市の北180km、車で3時間弱のエンジェニェイロ・コエーリョ(訳すと“ウサギのエンジニア”)という場所にあります。温暖で土質もよく、柑橘中心の農業地帯で、近くにはデュボン社(当時)やバイエル社、シンジェンタ社の試験場もありました。「植調」誌第24巻第8号(1990年)には、1980年に別の場所で設立されたブラジル植調が1989年にICI社の試験農場を購入して同地に移転したことが記載されています。ブラジルの農業市場がいまほど大きくなかった時代に、早々と試験場を開設された先見の明に感心いたします。

駐在中にはしばしばアグロコスモスを訪問しました。毎年圃場試験を委託していたし、また大豆やフェジョン豆、コーン、コーヒー、綿、サトウキビなどブラジルの主要作物が揃っているので、日本からの出張者の視察にもちょうどよかった

のです。場内にはため池があり、釣りが楽しめるとのことでした。ただこの池のために思わぬ害獣で困ってしまいました。バナナの試験のとき、池に住むカピバラが苗を食べてしまうのです。カピバラは、その肉は食せば美味しく、また水洗いのできる革は隣国アルゼンチンではカルピンチョと呼ばれる高級品として売られていて、捕獲する人が増えたためブラジルでは法律で保護されており、殺してはいけないので、柵で囲んで防いでいました。いま日本では動物園やアニメなどでカピバラは人気者ですが、私には大きなネズミにしか見えません。ルイスさんによれば、池にはカワウソや大蛇もいて、また敷地の森には地名になっているウサギの他に、アルマジロ、スカンク、オオトカゲ、ブラジルの国鳥であるオオハシ、ハチドリ、オウム、サソリにヒアリなどブラジルらしい動物がいるそうです。

2回目のブラジル駐在をしていた2015年ころ、若手研究員を研修生としてサンパウロ事務所に駐在させることになりました。彼はアグロコスモスに頻繁に通い、時には現地のホテルに宿泊して長期滞在し、試験や圃場の作業で鍛えていただきました。サンパウロ市とは違って、日本語も英語も通じない街で、よいブラジル研修になったと思います。そのころにはコンさんはすでに亡くなられ、ルイスさんが従業員と一緒に切り盛りされていました。ブラジル農業市場は大きく伸び、農業各社の自社試験圃場が充実してきたこともあって、以前は薬効薬害試験が中心でしたが、GLPの残留試験や、研究用の雑草の種子の販売が増えているとのことでした。また、周辺にあった柑橘畑は、市場の変化やグリーンング病のせいもあってか面積が減っており、住宅が増えていました。

2017年に帰任して、以来ご無沙汰していますが、ルイスさんはコロナ禍でもお元気にアグロコスモスでの仕事を続けられているそうです。早くコロナが落ち着いて、もう一度訪問し、ぜひカワウソとアルマジロを見てみたい、と考えています。